

ロマンス語における性の転換について

島 岡 茂

ロマンス語の名詞のもつ性が、原則としてその語源となったラテン語の性を踏襲していることは周知の事実である。ところがおなじ語源から出た名詞でも、ロマンス各語の間で性をことにするばあいが少ない。つぎにラテン語の男・女・中性に属するそれぞれ2つずつの名詞が、現在のイタリア・スペイン・フランスの各語でとる性別を示すと：

	lat.	it.	es.	fr.
花	florem(m)	fiore(m)	flor(f)	fleur(f)
塩	salem(m)	sale(m)	sal(f)	sel(m)
木	arborem(f)	albero(m)	árbol(m)	arbre(m)
爪	ungulam(f)	unghia(f)	uña(f)	ongle(m)
ミルク	lactem(n)	latte(m)	leche(f)	lait(m)
海	mare(n)	mare(m)	mar(m)	mer(f)

こうした性の転換にはいろいろ原因があろうが、その主なものは俗ラテン語の段階で起った曲用語尾の音変化と、その結果としての格の整理である。

ラテン語の3つの性(男・女・中)を代表する語尾はそれぞれ-us, -a, -umであり、このうち-aが第一、-us, -umは第二曲用に属している。ところが、すでに古典時代から語末の-s, -mが日常ほとんど発音されなくなると、男性・中性の形の上の区別はしだいにあいまいになってきた。たとえば：

corius < corium, dorsus < dorsum [Plaute]

caelus < caelum, vinus < vinum [Pétrone]

lignus < lignum, verbus < verbum [Itala]

のような用例が少ないのである。Plaute (250? ~ 184 B.C.)は時代こそ古い、作品はいずれも喜劇で、登場人物の台詞は当時の俗語を代表するものだし、50 A.D.以降と目されるPétroneのSatyriconは新傾向の俗語の宝庫とされている。ItalaはⅡ世紀ごろから訳された最初のラテン訳聖書で、Ⅳ世紀にできたVulgate版聖書のもとになったもの。いずれも大衆の理解を助けるためとくに平易な俗語が使われている。このように、話しことばにおける音の混同が性の区別の消滅をみちびいたことは明らかである。

しかし、形の区別が存続する他の曲用でも多くの中性名詞が、男・女いずれかの性に吸収され消滅していったことを考えると、中性の弱体化はすでにラテン語そのものに内在していたのではあるまいか。こゝで想いだすのはA. Meilletの説である。古代の印欧語には性のジャンル以前に、万物を“生きもの”と“無生物”とに区別する2つのジャンル(genre animé, genre inanimé)があった。たとえばサンスクリット語では「水」を生きものとみるとき āpaḥ とよび、無生物とみるとき udan- とよんだ。前者は animé のジャンルに属したのである。ところが、ギリシャ語では後者にあたる中性の hýdōr だけがあって前者にあたることばがないのに、ラテン語では aqua, unda の両方とも生きものジャンル(女性)になっている。しかもこのうち原意で存続したのは aqua だけだったこ

とも、ラテン語における genre animé の強さを立証するものである。いま一つ例をあげると、「火」はギリシャ語では inanimé で、中性の pŷr しかないのに、サンスクリットとラテン語ではそれぞれ genre animé にあたる agniḥ, ignis をとっている。pŷr にあたる中性的表現はラテン語でははじめから存在しなかったようである。この点ではギリシャ語の流れをくんでいるのはむしろゲルマン語で、ドイツ語の Wasser (hŷdōr) Feuer (pŷr) はいずれも中性である。

こうした対立は俗ラテン語の時代にまで尾をひいて、たとえば caelum > caelus の段階でも、男性形は神格化・擬人化された意味に多く使われ、中性形は単なる無生物として用いられていた。だから -um > -us の交替はラテン語における中性形 (inanimé) 後退の一環としても考えなければならない。

こゝでロマニア語のなかで唯一の例外をつくっているルーマニア語のはあいを見ると、さきほど例にあげた caelum, vinum, lignum の3語がそのまま中性で残っている。

lat.	it.	es.	fr.	rum.
caelum(n)	cielo, cielo,	ciel(m)		cer(n)
vinum(n)	vino, vino,	vin(m)		vin(n)
lignum(n)	legno, leño(m)			lemn(n)

このルーマニア語の形は西ロマニア諸語の形と同一で、男性形と区別がつかない。たゞこれらの中性形の複数語尾が多く -e (<a) となっている点から、その源が -us ではなく -um だったろうと推測されるのである。

ルーマニア語における中性の強さについては、第三曲用の中性 -us の存続によってもこれが立証される。tempus, pectus の2語についてみると：

lat-rum.	it-es-fr.
tempus, timp(n), tempo, tiempo, temps(m)	
pectus, piept(n), petto, pecho	(m)

となり、ルーマニア語だけが中性を保っており、その複数語尾 -uri はラテン語の -ora をそのまま受けついだものである (timp/timpuri, piept/piepturi)。この形はアナロジーから第二曲用の名詞にも移ったらしく、IV世紀末の獣医学用語に armus/armora (armi), VIII世紀の北イタリアには campus/campora (campi) などの例が多くみられ、ルーマニア語ではさらに広く第三曲用にまで拡大されている。[vînt/vînturi(m), vin/vinuri(n), sare/săruri(f)]。これらは俗ラテン段階における性の混乱を示すものだが、この形が古代イタリアとルーマニアにだけ残ったのは、これら両国の proparoxyton (語末から3音節目にアクセントをとる) にたいする愛好によるものと思われる。

このようにルーマニア語に中性が根づよく存続した理由としては、一般にスラブ語の影響があげられている。しかし、スラブ語の侵入はV世紀以後であるし、それ以前にもダキア地方の基層語としてギリシャ系の多くの方言があったはずで、これらの諸語——たとえば今日でもルーマニアの有力な地方語であるアルメニア語などでは、さきにも述べた genre inanimé (中性) の勢力がつよかったに相違ない。そこで、ラテン語のすでに弱体化しつつあった中性が、これら基層語のただ中に蒔かれて、再び生命をとり戻したものと考えることができる。

中性の男性化のいま一つの例は第四曲用 -u > -um, -us の変化である。俗ラテンの段

階では -m, -s はほとんど発音されなかったから、そのような混同をおかすのは無理もなかった。cornu > cornum, cornus, gelu > gelum, gelus, genu > genum, genus などの例は古く Lucilius (149? ~ 103 B.C.), Varron (110? ~ 27 B.C.) から Itala, Vulgate に至るまで随処にみられる。

以上は主として単数形で中性 -um (または -u) が男性 -us に変っていった過程であるが、つぎにはこれに応じて複数形がどう動いたか、それが近代ロマンス語にどんな影響を与えたか、を検討してみよう。単数形の性の転換が主として形の混同から生じたように、複数形でもやはり同じ原因から中性の女性化がはじまったのである。複数形で各性を代表する語尾はそれぞれ -i, -ae, -a である。そこで中性複数 -a は、女性単数の -a と同一で、そこから両者の混同がはじまったわけである。つぎに若干の中性名詞の単複両形の発展を示すと：

it - es - a. fr.

⎧	bracchium	>	braccio, brazo, braz	(m)
	bracchia	>	braccia, braza, brace	(f)
⎧	cornum	>	cornu, cuerno, cor	(m)
	cornua	>	cornu, cuerna, corne	(f)
⎧	folium	>	foglio, fueil	(m)
	folia	>	foglia, hoja, fueille	(f)
⎧	lignum	>	legno, leño	(m)
	ligna	>	legna, leña	(f)

中性複数の -a はもともと collectif (集合体) の意味をもっていたので -i (m), -ae (f) とは多少複数のニュアンスをことし、それだけに意味の上からも単数化の要因をもっていた。-a の女性単数化は -um の男性化とともに、古くは古典時代の俗語の中にもみられるが、II 世紀から VII 世紀にかけて、とくに西ロマニアの俗ラテン語で発展をみた。まず、女性複数化の例は VI - VII 世紀の成立になる Oribase のラテン訳に多くみられ、ova(n) の属格 30 例中、ovarum(f) が 28 回、ovorum(n) はわずかに 2 例にすぎない。folia(n) につく形容詞も女性複数形が多く folia virides teneras, folia molles などの例がみられる。単数化の例も、紀元後間もない Tabellae (呪詛帖) に brachias, labras, VIII 世紀以降と目される Reichenau, Kassel の Gloses (語解) に ligna...ardet, membras, ingenias などの例が多数みられる。一般に東ロマニアのイタリア、ルーマニア語では -a は集合体をあらわす複数形にとどまり、西ロマニアでは主として II 世紀以降女性単数形に発展した。その結果、イタリア語 braccio / braccia, ルーマニア語 braț / brate, 古代フランス語 braz / brace はそれぞれ同一語の単複数形であるが、スペイン語 brazo / braza, フランス語の bras / brasse はいずれも別々のことばである。元来 braccia は 2 本の腕を集合的にあらわすことばで、転じて 2 本の腕を伸ばした長さ (ひろ) を示すようになった。ところが西ロマニアの諸語では「腕」を個體的に把握するようになり、そこから原意を単数形であらわすことになって、女性化した -a は転義の「ひろ」だけを意味するようになったのである。braza, brasa, brasse (prov.) など、いずれも尺度 (ひろ) を示し、それぞれ新しい複数形 -s をもつに至った。そして原意の複数を示すためにも、同

じようにして複数形 -s ができたのである。cornu のばあいも、西ロマニアでは cuerna, corna (prov.) は転義の「つの笛・つの製品」を示すのであるが、フランス語 corne (f) だけは原意の「つの」をも併せ意味する。これは歴史的にフランス語では -o, -a > -e と変化し corno / corna が同じ corne に同化したためである。

ところが foglia と legna はイタリア語でも単数化して、男性形 foglio, legno と分離している。おそらく一枚の葉、一本の材では「葉」や「薪」を代表しにくかったためと思われる。folio の系統をひく男性形はスペイン、フランスの両語を除き「一枚の紙」の意味で残っている。スペイン・フランス語ではこの意味でも女性形 hoja, feuille が使用されている。スペイン語では hojo が「目」ojo と同音になり、フランス語では男女両形が corne のばあいのように同音化したためである。lignum / ligna の対立についても、単数(男)形は「材」、複数(女)形はその集合体「たきぎ」の意味でroman語に入り、legno / legna, leño / leña, lenh / lenha (prov.) になった。フランス語がこの形をすててフランス系の bois をとったのは、おそらく ligne (<linea) との同音化によるものだろう。

以上の例でわかるように、イタリア語の一部 braccio, labbro など、単数形が男性、複数形が女性になる若干の名詞では、-a 形の複数をもっぱら集合的な意味をもつため、それ以外の、個体的意味をもつ別の複数形 -i 形を生ずるにいたった。若干の例をあげてみる:

labbro (m. s.) labbri (m. pl.) labbra (f. pl.)
 membro (m. s.) membri (m. pl.) membra (f. pl.)
 frutto (m. s.) frutti (m. pl.) frutta (f. pl.)
 muro (m. s.) muri (m. pl.) mura (f. pl.)

以上のうち男性複数形 (-i) はそれぞれ「傷口」「成員」「産物」「壁」をあらわし、女性複数形 (-a) は「唇」「肢体」「果物」「城壁」を意味する。これによっても前者が単なる個体の複数、後者が集合体をあらわすことは明らかである。ところがイタリア語を除けばこの区別はいまいになり、たとえば「唇」はフランス・プロヴァンス語では「傷口」をも含めて女性形 lèvres, lavia となり、スペイン語ではあべこべに男性形 labio をとっている。「肢体」「成員」の方はプロヴァンス語に女性形 membra 「肢体」があるほかは、ほとんど男性形をとっている (membre, miembro)。

このように中性複数の語尾 -a が集合体のしるしとして感じられるようになると、ついには男性名詞の語尾にまで付けられるようになった。fructus, murus はそれぞれ第四、第二曲用に属する男性名詞で、本来の複数形は fructus, muri であるが、食用の「果物」と「城壁」を意味するときにかぎり、集合体と考えて fructa, mura の形が使われるようになった [Tardif]。このような用例は俗ラテン語ではかなり広範にわたり、carrus, digitus などその中に入る。つぎにroman諸語における結果をみると:

	it.	es.	pro.	fr.
f	frutto	fruto	fruch	fruit
	frutta	fruta	frucha	
m	muro	muro	mur	mur
	mura		mura	

フランス語では食用の「果物」をあらわす女性形がなく、必要に応じて男性複数形 (*fruits*) を用いて集合体をあらわす。「城壁」については、同じ集合をあらわす接尾辞 *-alia* をとる *muralia* から *muraille* (*fr.*), *muralla* (*es.*) が生まれ、フランス・スペインでは *mura* に代った。

集合をあらわす *-a* はまた強意 *augmentatif* の意味をもつことがある。そこから性の転換によって形の大小を示すばあいが生じた：

<i>coltello</i> (m) ~ <i>coltella</i> (f)	ナイフ	(小・大)
<i>huerto</i> (m) ~ <i>huerta</i> (f)	野菜畑	(小・大)
<i>pré</i> (m) ~ <i>prée</i> (f)	牧場	(小・大)
<i>sac</i> (m) ~ <i>saca</i> (f)	袋	(小・大)

このように、この例はイタリア・スペイン・フランス・プロヴァンスの各地に広くみられる。

つぎに、第二、第四曲用で語尾 *-us* をとる女性形の変化はどうであろうか。この形は男性形と同一であったため、はじめから非常に不安定であった。この形で注目されるのは「樹木」の名である。ラテン語では「樹木」はすべて女性、「果実」はすべて中性であった。この区別はさきにもふれたように、ギリシャ語の影響で、樹木は生産するものだから女性、果実は生産されたものだから中性なのである。ところがこの女性形 *-us* は単に第二曲用の男性名詞と形が紛らわしいばかりでなく、果実を示す中性の *-um* とも同音化するようになった。そこで2つの現象が起った。一つは女性 *-us* 形の男性化で *Thesaurus* によれば *alnus*, *pōpulus* はIV世紀には男性化していたという。*fagus*, *fraxinus*, *pinus* はややおくれてロマン語に入ってから男性化したようである。ところがこれらの名詞をついだロマン語のうち、ときに例外的に女性形をとるものがある。たとえば「はんのき」*alnus* ではプロヴァンス語に *alna*, *auna* の形が、「ぶな」*fagus* ではスペイン語に *haya* の形がみられる。同じように、第四曲用に属する *quercus* 「かし」も近代語の多くで *-a* をとっている。これらの理由としてはいろいろな推測が行われているが、一つには俗ラテン語の段階で、形に性を合せる代りに、性に形を合せた *alna*, *faga*, *querca* の形が存在したのかもしれない。あるいは、*arbor alnea*, *arbor fagea*, *arbor quercea* の形容部が残ったとも考えられる。イタリア語の *quercia* は明らかに後者から出たものである。*arbor* (f) の男性化は樹木名の男性化がすすむにつれて広がっていったらしい。古くは *Italia* 聖書からVI世紀にかけて *arbor* は男女両性に使われていた。現在のロマン語ではほとんど男性化しているが、ポルトガル語 *árvore*, サルジニア語 *arbure* だけは女性名詞にとどまっている。フランス語でもXIV世紀のアングロ・ノルマンのテキストに *une arbre bestournée* の形がみえ、ルネサンス期には *Rabelais*, *Calvin* などが意識的に女性に使っている。(Comme arbre nouvellement plantée Rab.)

次に果樹と果実との関係を見ると、さきにも述べたとおり古くは *pomus* (f) 「果樹」と *pomum* (n) 「果実」の対立にみられるように *-us* / *-um* でその区別をしていた。この両者が音声的に同一化すると「実」をあらわすためには集合体の複数語尾 *-a* を使うようになった。つぎの例をみていただきたい：

	lat.	it.	es.	fr.
〔	pirus (-um)	pero		
	pira	pera	pera	poire
〔	pomus (-um)	pomo	pomo	(pom)
	poma		(poma)	pomme
〔	ficus (-um)	fico	higo	
	fica			figue

イタリア語では *pero/pera*, *melo/mela* (リンゴ) のように、古い樹木と果実との対立が比較的はっきり残っているが、他では女性形の「果実」には例外がないもの、男性形には *-us/-um* の両方が混同しているため「樹木」と「果実」が混同されていることが多い。たとえばイタリア語の *fico*, *pomo* はそれぞれ「いちじく」「りんご」の樹と実とをあらわしている。南イタリアの地方語には古い第四曲用の女性形が各地に残っている。たとえば南ウンブリアに *la figo/le figo*, カラブリアに *a ficu/e ficu* などである。この点からみて女性形 *fica* はガリア地方に主として発展したものと思われる(プロヴァンス語 *figa*, フランス語 *figue*)。またルーマニア語では「りんご」を *măr* というが、この語源は「木」では *malus*, 「実」では *malum* であった。そのことは複数形が「木」では *meri*, 「実」では *mere* であることによっても推定できるのである。

第三曲用に属する男性抽象名詞の語尾 *-or* は、一部で女性に転化した。古くはⅡ世紀にローマの碑文中でみられ、Ⅴ世紀の *Grégoire de Tours* には多くの例がみられる (*tanta splendor, magnam timorem*)。一般に抽象名詞には女性が多かったこと、とくに女性の抽象名詞に多い語尾 *-ura* との形の類似がこの転化の原因だったらしい。また同じ男性名詞で行動主をあらわす *-or* (*auctor, censor, suasor*) との区別もその一因だったといわれる：

	lat.	it.	es.	pro.	fr.
	<i>calor</i> (m)	<i>calore</i> (m)	<i>calor</i> (m)	<i>calor</i> (f)	<i>chaleur</i> (f)
	<i>color</i> (m)	<i>colore</i> (m)	<i>color</i> (m)	<i>color</i> (f)	<i>couleur</i> (f)
	<i>dolor</i> (m)	<i>dolore</i> (m)	<i>dolor</i> (m)	<i>dolor</i> (f)	<i>douleur</i> (f)

このうち *color* はスペインではまれに女性に、プロヴァンスでは逆に男性にも使用される。以上でわかることはこの形の女性化ははじめからガリア地方に発達したもので、これがカタロニアをへて一部スペインにまで及んだらしいことである。なおフランス語の「愛」*amour* も *amor > ameur* (f) で古くは女性名詞だったのが、ルネサンス期に語源に合わせて男性化したものだが、複数形の一部に今も女性の名残りをとどめている (*les premières amours*)。これらはいわゆる強意の複数である。

これと形の似たものに「花」*florem* がある。このことばはもとは男性名詞であるが、イタリア語を除けば西のポルトガル (*flor*) から東のルーマニア (*floare*) に至るまで、ことごとく女性化しているのである。一般に対格 *-ore* (m) をとる名詞は性が不安定だったらしく、たとえば *leporem* (うさぎ) にしても、もとの男性をとっているのはフランス語 *lièvre* (m) だけで、他のロマン語ではみな女性化している (*lepre, liebre, lebre*)。おそらく *-ora, -ura* との形の類似が一因だったかもしれない。ただし *florem* のばあい、形だけでなく、意味の上でも女性化の原因は充分あったように思

われる。花の美が女性的だとか、花の名称に女性名詞が多いとかのほかにも、花は実を結ぶものであり生産力をもつものである。それに — そのためかもしれないが — ゲルマン系のことばでも、たとえばゴート語では *blōma* (f) 「花」は女性なのである。

このように、*-us*, *-a* のように形のよりどころがはっきりしているばあいには、性の転換は形によって支配されることが多いが、*-em*, *-is* のように形そのものが不安定なばあいには、性の転換は意味によって支配されることが多いのである。まず中性の *lac*, *mare*, *mel* についてみよう。*lac* が男性化して *lactis* と形を変えたのは、古くは *Pétrone* の中にもみえるが、Ⅷ世紀の *Anthimus* の中に “*puri lactes*” 「純ミルク」とあるのを見ると、このころには文語の中にも使われていたらしい。近代語でも多くは男性のままであるが、スペイン・カタロニア・ガスコーニュ語 (*la leche*, *la llet*, *la ley*) などでは女性化し、プロヴァンス語では男・女両性に使われている。おそらく「牝牛」*vaca* との意味上の連想から女性化したものと思われる。つぎに *mare* の男性化は俗ラテン時代の碑文にも散見するが、Ⅷ世紀の紀行文にも “*qui maris*” 「その海」と、はっきり男性化している。ところがこのことばは *terra* 「陸」、*aqua* 「水」などとの連想から、早くから女性化したらしく、たとえば *Densusianu* によるとダキア地方の俗ラテン語ですでに女性に使われていたといわれる。今日、イタリア・スペイン語では男性 (*mare*, *mar*)、フランス・ルーマニア語では女性 (*mer*, *mare*)、プロヴァンス語では男女両方 (*mar*) に使われている。スペインでも古雅な表現では女性に扱うが、古代プロヴァンス・カタロニア語の影響によるものと思われる。

mel も早くから *mellis* の形で男性化したようだが、スペイン・ルーマニア語では女性である (*miel*, *miere*)。スペイン語のばあいは *lacte* > *leche* の変化と同じように、ラテン語 *apicula* > *abeja* 「蜜蜂」との連想から女性化したらしい。そしてここでも *leche* 同様、隣接するカタロニア語 *mel* や、プロヴァンス語の一部でも女性になっている。Bourciez が指摘しているように、この地域一帯ではとくに名詞の女性化が目立つようである。参考までに、理由のはっきりしない女性化の例をあげると：

lat.	it.	fr.	es.
<i>salem</i>	<i>sale</i>	<i>sel</i> (m)	<i>sal</i> (f)
<i>sanguem</i>	<i>sangue</i>	<i>sang</i> (m)	<i>sangre</i> (f)
<i>pontem</i>	<i>ponte</i>	<i>pont</i> (m)	<i>puente</i> (f)
<i>crinem</i>	<i>crine</i>	<i>crin</i> (m)	<i>crin</i> (f)

などがある。これらの若干がルーマニア語でも女性化しているが、その中にはスペイン語とことなり、意味ではなくて形によってそうなったものもある。たとえば *mare* 「海」、*miere* 「蜂蜜」、*sare* 「塩」などでは、流音のあとにつづく添加音 *-e* が女性のしるしとみられたらしい。しかし *punte* (f) 「橋」では、スペイン語 *puente* 同様、女性化の理由は不明である。意味による変化はとくにイベリア・ガリア地方に多く、あべこべにもっともラテン語の性をよくとどめているのはイタリア語である。

たとえば *vallem* 「谷」はラテン語では女性だったが、スペイン語 *valle*、フランス語 *val* ではいずれも男性化している。その動機はフランス語の成句 “*par monts et par vaux*” 「山こえ谷こえ」でもわかるように *montem* との連想によるものといわれる。これに反してイタリア・プロヴァンス語 (*valle*, *val*) ではいずれも女性のままである。いま一つ、ラテン語の *hostem* はもともと「敵軍」の意味では男性だったが、いつ

か「軍隊」の意味で女性化した。Ⅴ-Ⅶ世紀にかけての法典 *Lex Salica*, *Lex Visigothica* などではほとんど女性に扱われていた。この変化には *expeditio* (f) 「派遣軍」との意味の関連があったといわれ、その結果、ロマンス語では古代イタリア・フランス語 *oste*, *ost* は男性、スペイン語 *hueste* では女性として残った。

さいごに、フランス語だけでとくべつの性をとる若干の名詞をあげ、その原因について考えてみよう：

lat.		it.		es.		fr.
<i>artem</i>	(f)	<i>arte</i>	(f)	<i>arte</i>	(m-f)	<i>art</i> (m)
<i>sortem</i>	(f)	<i>sorte</i>	(f)	<i>suerte</i>	(f)	<i>sort</i> (m)
<i>ungulam</i>	(f)	<i>unghia</i>	(f)	<i>uña</i>	(f)	<i>ongle</i> (m)
<i>studium</i>	(n)	<i>studio</i>	(m)	<i>estudio</i>	(m)	<i>étude</i> (f)
<i>methodum</i>	(f)	<i>metodo</i>	(m)	<i>metodo</i>	(m)	<i>méthode</i> (f)

artem (*ars*) は “*Ars longa*” 「芸道はながし」でもわかるように女性名詞だったが、フランス語では古くから男性接尾辞 *-ard* との形の類似から男性の扱いをうけてきた (*bâtard* / *bâtarde*)。しかし中世までは女性の扱いもうけたらしく、*Montaigne* のエッセイにも “*Que devient cette belle art?*” (I, 36) のような女性形がみられる。スペイン・プロヴァンスの男性形もフランス語の影響と考えられる。*sortem* (*sors*) 「運命」についても同じことがいえよう。フランスではすでに古代に *sortem* の意味の一部が *sorte* (<*sorta*) と形をかえ、そのまま女性名詞になった。そこでこの2つの形 *sort* / *sorte* を対比して前者が男性名詞に転化したわけで、これまた X VI 世紀以前には女性の扱いをうけたこともある。“*tel est ou ma sort ou ma destinée*” (*Rabelais*)。 *ongle* も古くは女性名詞だったらしく、XII 世紀に “*ungle fendue*” 「裂けた爪」という形がみられる。これが男性化した最大の理由は *angulus* > *angle* (m) との対比で、*-o* (<*-u*) と *-a* が同じ *-e* に変化したための混同である。*aigle* (<*aquila*) がフランス語だけで男性化したのもまったく同じ理由による。

studium と *methodum* では同じ混同が逆の結果を生んでいる。つまり *-e* (<*-o*) が *-e* (<*-a*) ととり違えられたのである。とくに *étude* では語頭添加音 *e-* のために、冠詞による性の区別ができなくなり、そのため語尾の影響が強化され、*-e* がとりわけ女性として意識されたようである。しかし XVI 世紀には “*son estude principal*” (*Marot*), “*des principaux estudes*” (*Rabelais*) のように男性の例も少なくない。*Malherbe* は書斎の意味では女性、研究の意味では男性と説いている。*methodum* はラテン語では第二曲用 *-us* 型の女性名詞で、形の混同から男性化したものだから、ルネサンス期にはじめてこのことばをとり入れたフランスでは、はじめから語源に忠実に女性として扱ったのである。

以上を要約すると、ロマンス語における性の転換はほとんど大部分が形のアナロジーによって起ったものだが、一部には意味上のアナロジーによるものもある。また関係の深い言語の間では単なる模倣によって性を変えるばあいも少なくない。この点でとくに興味があるのはプロヴァンス語である。古いイタリア語系の性と新しいフランス語系の性とが交錯し、*color*, *den*, *lach*, *mar*, *mel*, *sal*, *sanc*, *serpen* など多くの名詞で男女両性

が使用されている。これらの使用分布を詳しく調べたらさらに新しい材料が発見されるかもしれない。

これらの問題については、つぎの参考書目が有益である：

V. Väänänen: Introduction au Latin vulgaire, pp. 107~112.

C. H. Grandgent: Introduccion al Latin vulgar (tr. B. Moll),
pp. 215~220.

C. Battisti: Avviamento allo studio del Latino volgare,
pp. 196~198.

M. C. Diaz y Diaz: Antologia del Latin vulgar, p. 231.

E. Bourciez: Éléments de Linguistique romane, pp. 232~236.

H. Lausberg: Romanische Sprachwissenschaft, III, 1, pp. 37~39.

W. v. Wartburg: Problèmes et Méthodes de la linguistique,
pp. 82~86.

その他一般的に：

C. Tagliavini: Le origini delle Lingue Neolatine.

G. Rohlfs: Historische Grammatik der italienischen
Sprache, Bd. II.

G. Rohlfs: Die lexikalische Differenzierung der romanischen
Sprachen

(早稲田大学教授)